

「被害者は、被害者ではないのか」という元記者の無自覚さ

元慰安婦（キムハクスン）が《キーセン（妓生）学校に通っていたことを隠し、人身売買であるのに強制連行されたように書いたという点》も、元記者に対する批判の一つであるが、彼は手記でこう釈明している。《キーセンとは韓国の芸者である。確かに私は、キーセン学校について書かなかった。》そして、《私は「キーセンだから慰安婦にされても仕方ないというわけではない」と考えたので、あまりキーセンということに重きを置いていなかった。キーセンだから慰安婦になるというわけでもなかった。金学順さんは初めて証言テープを聞いた時から「だまされて慰安婦にされた」と話していたからだ。》

キーセンであったことはどうでもよいと思ったから、キーセンの経歴については書かなかったというようにも読めるが、そうではない。《「キーセンだから慰安婦にされても仕方ないというわけではない」と考えた》ことは、キーセンと慰安婦とが直結されて読者に判断されなくなかったから、《キーセン学校について書かなかった》というように考えられる。つまり、《書かなかった》のではなく、書きたくなかった、書かないほうがよかった、ということであり、そこには明らかに元記者の判断が働いている。もう少し突っこめば、「キーセンだから慰安婦にされても仕方ない」と読者に判断されなくなかったから、キーセンの経歴については書かなかったということであり、そうすると、《あまりキーセンということに重きを置いていなかった》どころか、逆に《キーセンということに重きを置いてい》たことになる。

「キーセンだから慰安婦にされても仕方ない」と判断する読者もいれば、元記者のように「キーセンだから慰安婦にされても仕方ないというわけではない」と考える読者もいるのであり、そこは読者の自由な想像に任せるとして、元慰安婦の経歴に関する情報の一つにすぎないキーセンを元記者は書く必要があったのではないか、という疑問が提出されてもおかしくはないし、隠すほどのことではないと思われる。元記者は書かなかただけで隠したわけではないと反駁するだろうが、書かないほうがよいと少しでも思ったとき、それは「隠した」ことになるのである。キーセンであったことが慰安婦問題にとって重要な情報なのかどうかはわからないが、記者というものは知り得た情報はできるかぎり包み隠さず、すべて読者の前に開示して読者の判断に委ねるのが基本的な原則なのではないだろうか。「隠した」のでなければ、「操作した」ということになるのではないか。

だが元記者はこう強調する。《キーセン学校へ通ったか、通ってなかったかは大きな問題ではないと私は思う。》私も同じ考えである。であれば、書いてもよかったのだ。《金学順さんが、どんな学歴であっても、自ら望んで慰安婦になったわけではない。被害者は、被害者ではないのか。》と続けているが、思慮の浅い主張である。だから『文藝春秋』編集部にも、《しかし、彼女がどういう形で被害者になったのか、十分に検証された形跡はない。なぜなら、彼女は慰安婦になった経緯について、聞くたびに違ったことを答えたからだ。》と反駁されねばならなくなる。

《被害者は、被害者ではないのか。》といういい方で、元記者は何をいおうとしているのだろう。批判者たちは、元慰安婦たちが被害者であることを直視していないし、否定しようとしているといいたいのだろうか。元慰安婦たちが被害者であるかどうかは問題になっているのではない。この被害者である女性たちを、自分は記事に書いて戦時中の日本帝国主義の犯罪を暴き、訴えているという元記者の思い上がりと精力的な無知こそが問題なのである。いいかえれば、自分の記事の根底を一度も疑わないところで元慰安婦たちと連帯しうると考えていることが問われているのだ。

韓国の支援団体も元慰安婦たちを自分たちの活動のために担ぎ上げているだけで、本当に寄り添っているわけではない。元記者も元慰安婦たちの被害者性の立場に立った記事を書くことによって、彼女たちに寄り添っているかのように思い込んでいるだけのことで、彼は自分は正しいことをしているという快感のうえに立っているにすぎないのである。そこに本質的に欠損しているのは、彼女たちの一人一人に「被害者」以前の「ただ一人の人間」として相対しようとする姿勢である。彼女たちに「被害者」としてではなく、「ただ一人の人間」として敬意を表しようとする態度がみられないのだ。

彼女は「被害者」として自分の目の前に現れているから、自分は記者として彼女を取り上げる義務と責任があった、というのが元記者の主張であろう。確かに彼女は「被害者」として元記者の前に現れていたが、同時に「ただ一人の人間」としても現れていたのである。しかし、元記者には「被害者」

としての彼女しか必要がなかったから、「ただ一人の人間」としての彼女を見つめようとするまなざしをもたなかった。彼女を「被害者」性のなかに押し込めようとしたのである。それは支援団体と共通する視線であった。「被害者」として現れている彼女が「被害者」としての視線でしか扱われないなら、彼女自身にもほとんど気づかれていない「ただ一人の人間」としての彼女が、何かを心の底から発しようとする場所はどこにも見出されなかった。

朴裕河教授は元慰安婦の人とも会って、彼女たちの心中も聞いたことを語っていた。771号では彼女に対する告訴状について、「元慰安婦の方達のことは一言も批判はしていません。元慰安婦の方の中には、証言内容を変えた人もいましたが、私はそうした元慰安婦でさえも批判はしていない。元慰安婦の言葉には耳を傾けるべきだと考えていますし、むしろさまざまな周辺状況が証言を変えさせたと考えています。」と述べており、自分は被害者として以上に「ただ一人の人間」として、「元慰安婦の言葉には耳を傾けるべきだと考えています」と語ろうとしているのが聞きとれる。

私が朴裕河を信じるのは、慰安婦問題を「帝国と慰安婦」の視点で切り拓いていこうとしているからだけではない。その視点の根底には、元慰安婦たちを被害者性から解放するために、「ただ一人の人間」として彼女たちに接しようとしているのが読みとれるからである。元慰安婦たちにかかわらず、たとえ意識していなくても、私たちは誰でも「ただ一人の人間」として生き、死んでいくことに変わりはない。

朴裕河のこのような姿勢～態度が、ナヌムの家に心身ともに拘束されている元慰安婦たちのなかで、一人の元慰安婦の心と共鳴し合ったことが772号で語られている。

〈「本を出版した後、何人かの元慰安婦の方と会いました。昨年の秋に、ナヌムの家である元慰安婦の方と食事をしたとき、彼女は興味深いことを口にしたのです。彼女は日本語が達者で『彼ら（日本）を許してあげたい』、『日本を非難したくない』と話しました。彼女は、許すことで日本が新しい行動を起こしてくれると期待を寄せていたのです。彼女は日本大使館前に少女像を作ったことや、国家賠償を求めるといふ挺対協の活動にも批判的でした。彼女とはいろいろな対話をしました。私は彼女と会いながら、『帝国の慰安婦』で書いたことは間違いではなかったと確信を持つことができました」

しかし、朴裕河と心を通わせる元慰安婦との関係を警戒した、ナヌムの家は《面会を妨害するようになったという》。そこに見てとれるのは、元慰安婦の考えに即して自由に公正に支援しようとする姿勢ではなく、彼女たちの立場を利用する自分たちの反日活動と齟齬をきたすような発言の口封じである。彼らの活動の歪みは元慰安婦たちをも戦時中と同様に拘束し、蝕んでいるのであろう。つまり、こういうことである。元慰安婦たちは戦時中は日本軍に翻弄され、戦後は韓国の支援団体に善意を装って翻弄され、食べ物にされつづけているのであろう。

「彼女は家族もいなくナヌムの家では孤立していて、私に会いたいと強く望んでいました。しかしナヌムの家は私と彼女を面会させず、彼女の自由意志を妨げるような行動をとり続けた。／今年の6月、彼女は体調を悪くさせて亡くなりました。そのとき、ナヌムの家の所長は『この方も国家賠償を求めていた』と発言したのです。明らかに本人の意思とは違う言葉に愕然とさせられました」

改めて朴裕河のこの発言から感じられるのは、戦時中は日本帝国によって「ただ一人の人間」として生きることが阻害されてきた元慰安婦たちは、戦後もナヌムの家等の支援団体によって被害者として生きつづけることを強要されて、「ただ一人の人間」として生きられなくさせられているという構図である。朴裕河に「会いたいと強く望んでい」た元慰安婦が「ナヌムの家では孤立してい」たのは、単に「彼ら（日本）を許してあげたい」、「日本を非難したくない」という、支援団体に反する考えをもっていただけではない。なによりもナヌムの家では「ただ一人の人間」として呼吸する場所がどこにも見出されないことの孤立感にほかならなかったのであり、彼女が朴裕河に会いたがったのは、もちろん、被害者であることから遠く離れて、「ただ一人の人間」としての接触を願っていたということにほかならない。

いうまでもないが、ナヌムの家に拘束されている元慰安婦たちの中で彼女だけが孤立していたわけではない。すべての元慰安婦たちが「ただ一人の人間」であることから孤立していたのである。彼女はそのことを深く感じようとしていたが、他の元慰安婦たちはナヌムの家による拘束の度合によって、そう感じることを自ら断とうとしていただけのことかもしれない。元記者が《被害者は、被害者ではないのか。》というとき、元慰安婦たちを被害者の視線で拘束しつづけることによって、彼女たちが被害者としてしか生きられない息苦しさをいつまでも押しつけていることの無自覚さを表明していたのである。